小田原の遺跡探訪シリーズ５

高田遺跡群・下堀方形居館

― 古代高田郷と中世の居館 ―

小田原市教育委員会

例　　言

1　本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今回は第 5 号として、小田原市高田・別堀に所在する高田遺跡群（小田原市№16・259 遺跡）および小田原市下堀に所在する下堀方形居館（№219 遺跡）とその周辺遺跡（№15・271・272 遺跡）を取り上げました。

2　本書の刊行は、平成 21 年度国庫補助事業である「埋蔵文化財保存活用整備事業」の一環として行いました。

3　本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）

荒井秀規(藤沢市教育委員会)、中田英・天野賢一((財)かながわ考古学財団)、御堂島正･谷口肇(神奈川県教育委員会)、田尾誠敏（東海大学)、藤沢市教育委員会、(財)かながわ考古学財団、神奈川県教育委員会

4　本書の作成は、小田原市教育委員会生涯学習部文化財課渡辺千尋が担当者となり、同課山口剛志・佐々木健策・小林隆・諏訪間順が補佐しました。図版の作成には、北條ゆうこの協力を得ました。

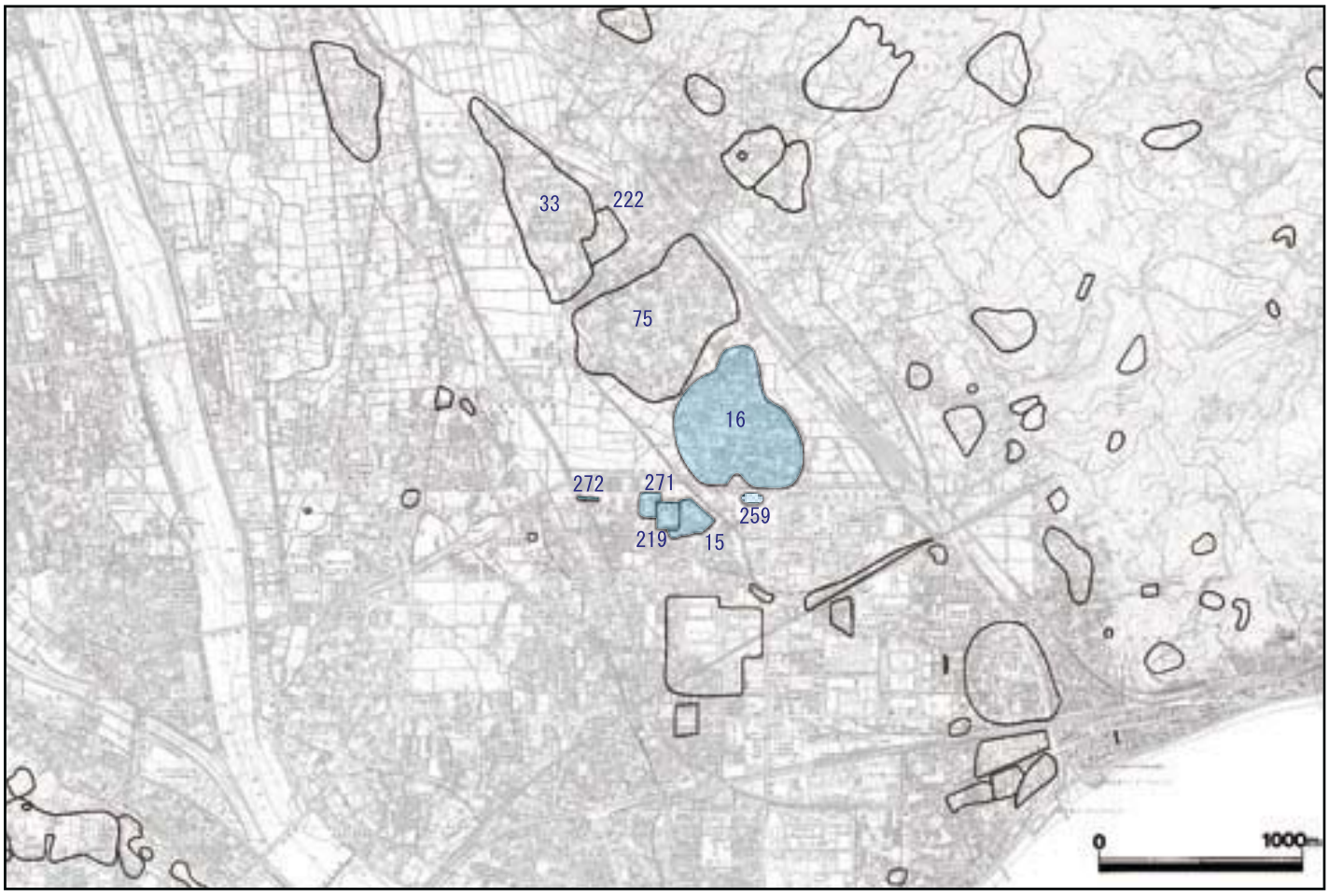

図１　遺跡周辺位置図（1/50,000）

［表紙］　高田・下堀地区空中写真（成田上空より）　(財)かながわ考古学財団提供
［裏表紙］　高田南原遺跡第Ⅱ地点銅鏡（1/1）　神奈川県教育委員会蔵

Ⅰ　森戸川右岸の遺跡

1　高田・下堀周辺の遺跡と自然地形

大磯丘陵の西麓には、JR御殿場線と並行するように森戸川が流れています。森戸川の東岸には、千代台地と呼ばれる標高20～30mほどの小高い丘が広がっています。台地上とその周辺には、千代遺跡群（小田原市No.75 遺跡）や永塚遺跡群（No.33 遺跡）・下曽我遺跡（No.222 遺跡）といった、県内屈指の遺跡群が広がっています（図 1. すでにシリーズ 3・4 で紹介しましたので、詳しくはそちらを参照してください）。

本書で取り上げる高田遺跡群（No.16 遺跡）は、千代台地に広がるもう一つの遺跡で、千代台地の一番南側の高田・別堀に所在しています。高田・別堀周辺は、千代台地の中では比較的標高が低く、最も高い若宮八幡宮付近で、約20mの高さです。遺跡は主に台地上を中心に広がっていますが、小田原厚木道路を挟んで南側、高田浄水場の北西側の低地部にも広がっていることが、近年明らかになっています（No.259 遺跡）。

また、JR下曽我駅の南およそ1.5kmの場所には、地図上で見ると南北約 130m× 東西約100mの長方形をした区画が残っていることが分かります。これは、中世の屋敷地の名残と考えられるもので、下堀方形居館と呼ばれています（No.219 遺跡）。下堀方形居館は、鴨宮面と呼ばれる酒匂川の氾濫によって形成された平坦面に位置しています。周辺には、No.271 遺跡・No.272 遺跡やNo.15 遺跡が広がっています。

写真 1　大磯丘陵から高田・下堀方面を望む（1988 年撮影）（大島ほか 1988）

2 高田・下堀の地名

高田の地名は、天平7年(735)の『相模国封戸租交易帳』の中で、舎人親王の封戸の「足下郡高田郷伍拾戸」として登場します（写真 2)。皇族、貴族や寺院、神社には、経済的特権のひとつとして、封戸に指定された戸が出す調・庸の全部と田租の半分（のち全部）が支給されました。稲穀で納められた封戸租は重く、運搬には不都合であったため、絹織物などに交換されて都に納められたため、帳簿として交易帳が作成されました。天平7年の『相模国封戸租交易帳』は、現存する唯一の交易帳として正倉院に伝わる貴重な資料です。高田郷で納められた封戸租は、天武天皇の皇子で、『日本書紀』の編纂者としても有名な舎人親王の下へ納められていたことが分かります。

また、承平年間 (931 ～ 938) に成立した『和名類聚抄』にも「足下郡」の項目に「高田」の地名を確認することができます。古代高田郷の範囲は、「西大友」「東大友」として現代に名が残る北側の足上郡(大)伴郷との境界まで広がっていたと推測され、現在の高田よりも広域であったと考えられています。

一方、下堀の地名は、戦国時代の永正16年(1519)の『伊勢菊寿丸所領注文』に初めて見られます。江戸時代後期に記された『新編相模國風土記稿』には、「民戸十六。村落ノ四方二堀アリ。幅二間許。」などと記載され、当時の様子を伝えています。

2 高田・下堀の地名

高田遺跡群では、これまで 18 地点で本格調査が行われています（2010 年 2 月現在)。

写真 2　相模国封戸租交易帳（藤沢市教育委員会所蔵複製　原資料は「正倉院宝物」）

高田遺跡群は、遺跡名を大字小字名により「高田宮町（たかたみやまち）」「高田北之前（たかたきたのまえ）」「高田南原（たかたみなみばら）」「高田美弥咲（たかたみやさき）」「別堀十二天（べっぽりじゅうにてん）」のように呼んでいます。

高田・別堀に広がる高田遺跡群は、昭和30年代に本格的な調査が行われた千代遺跡や下曽我遺跡と比較すると、調査事例はほとんどなく、採集資料によって、その内容の一部が知られている状態でした。昭和59年(1984)の市道拡幅工事(図11-9)では、事前調査がないまま工事が行われるという、不幸な事態が発生してしまいましたが、採集された遺物は、遺跡の内容を検討する上で、貴重な資料となりました。1990年以降は、試掘調査が行われる機会が増加しました。90年代末以降は、宅地化の進行に伴い、本格調査が行われることも多くなり、遺跡の状況が具体的になってきています。

一方、下堀は、下堀宮ノ脇（しもぼりみやのわき）遺跡（No.15 遺跡）で試掘調査が行われたことはありましたが、現在まで、あまり調査の多い場所ではありません。近年、県道の整備事業に伴って、下堀塚田町（しもぼりつかだまち）遺跡・下堀広坪（しもぼりひろつぼ）遺跡(No.271遺跡)、下堀道上町（しもぼりみちうえまち）遺跡(No.272遺跡)で本格調査が行われ、下堀方形居館周辺の様子が次第に明らかになってきています。

年代	時代	おもな出来事	市内の遺跡
六〇〇〇〇年前	旧石器時代	千代台地がかたち作られる 細石刃が日本列島全体に広まる	谷津山神遺跡
一五〇〇〇年前	縄文時代 草創期	土器・石鏃の使用が始まる	
	早期	定住化の進行	
五〇〇〇年前	前期	気候温暖化により海面が上昇（縄文海進）	羽根尾貝塚
	中期	東日本で環状集落がつくられる	久野一本松遺跡
二三〇〇年前頃	後期		
	晩期	北部九州に水稲耕作が伝わる	前川山王前遺跡
二三九	弥生時代 前期	鉄器や青銅器の使用が始まる	中里遺跡
五七	中期	奴国王、後漢光武帝より金印を受ける	**高田北之前遺跡**
五三八	後期	卑弥呼が魏に使いを送る	**高田宮町遺跡**
四二四	古墳時代 前期	前方後円墳の築造が始まる	千代南原遺跡
	中期	倭の五王の時代が始まる	**高田南原遺跡**
	後期	仏教伝来	久野下馬下遺跡
六四五	飛鳥時代	前方後円墳の築造停止	久野古墳群
七〇一		大化の改新 大宝律令の完成	田島横穴墓群
七一〇		平城京へ遷都	千代寺院跡
七四一	奈良時代	国分寺建立の詔	**高田北之前遺跡**
七九四		平安京へ遷都	国府津三ツ俣遺跡
一一九二	古代 平安時代	源頼朝、征夷大将軍に任じられる	下曽我遺跡
一一九三		曽我兄弟の仇討	永塚下り畑遺跡
	鎌倉時代		**下堀宮ノ脇遺跡**
一三三八	南北朝時代	足利尊氏、室町幕府を開く	久野中世集石墓
一四六七	中世 室町時代	応仁の乱	
一五九〇	安土桃山時代	豊臣秀吉の小田原攻め	小船森遺跡
一六〇三	近世 江戸時代	徳川家康、江戸幕府を開く	小田原城八幡山古郭
一七〇七		富士山宝永の大噴火	**下堀方形居館**
一八五三	近・現代	ペリー来航	小田原城総構
一八六八		五箇条の誓文の公布、明治改元	史跡小田原城跡
一九四五		太平洋戦争終結	小田原城下関連遺跡 早川石丁場群

表1　関連年表

Ⅱ　台地上での暮らし

1　生活のはじまり（旧石器時代～縄文時代）

高田・下堀周辺では、旧石器時代にまで遡る人びとの生活の痕跡は見つかっていません。およそ13,000年前になると、気候が温暖化し、人びとが環境に適応した結果、新しい時代、縄文時代が始まります。市道4385号の改良工事(9)で採集された土器片の中には、縄文時代早期の土器片（約7,000年前）が数点含まれています。千代台地全体でも、縄文時代の集落はほとんど見つかっていないことから、人びとは曽我の丘陵上を主な活動の場として利用し、千代台地にも時おり足を踏み入れていた、そんな光景が想像されます。

2　ムラの誕生（弥生時代後期～古墳時代前期）

3世紀の前半頃、弥生時代後期と呼ばれる時代になると、高田の台地上では、たくさんの住居が造られ、人々の土地利用が活発化しました。高田のムラは、弥生時代後期に始まると言っても良いでしょう。弥生時代後期になり、人びとの活動が活発化する状況は、北側に位置する千代遺跡群や永塚遺跡群とも共通の現象で、古墳時代前期まで継続的に人々の生活が営まれていたようです。

この時代の住まいは、竪穴住居と呼ばれる半地下式の住居が一般的でした（写真 3）。地面を数十センチ程度掘りくぼめ、床を整えた後、柱を据え、その上に草や土で屋根を葺（ふ）いて造ったと考えられています。発掘調査では、上屋（うわや）が確認されることはまずないため、掘りくぼめた住居の穴や柱の穴だけが検出されることがほとんどです。また、当時の人々が繰り返し生活の中で踏み固めた床が、硬い土の層として確認されたり、住居の中に造られた炉が検出されたりすることもあります。

写真 3　高田北之前遺跡第Ⅱ地点の竪穴住居
（林原ほか 2001）

若宮八幡宮東側の高田宮町遺跡第Ⅲ地点(6)では、約40㎡の小さな面積の調査でしたが、10軒以上の住居が重層的に検出されました（写真4)。周辺の高田北之前遺跡第Ⅱ地点(2)でも、9軒の竪穴住居が検出されていることから、若宮八幡宮周辺には、この時期の大規模なムラが継続して作られていたことが考えられます。このほかに東学寺（とうがくじ）の南側の別堀十二天遺跡にもムラがつくられていたようです。

写真4　高田宮町遺跡第Ⅲ地点の竪穴住居群

高田美弥咲遺跡第Ⅰ地点(13)や別堀十二天遺跡第Ⅱ～Ⅵ地点(15～19)などでは、地割れが多く見つかっています（写真5･6)。地割れは、弥生時代～古墳時代の住居などのかたちを壊しているため、調査を難しくしていることが多く、発掘の担当者を悩ませることもしばしばです。小田原は、江戸時代以降で、記録に残っているだけでも20回以上の大きな地震の被害を受けている地域です。遺跡に残る地割れの時期を特定することは、精緻な検討が必要ですが、自然災害と上手に付き合っていくヒントが、遺跡の中に隠されているかもしれません。

写真5　高田美弥咲遺跡第Ⅰ地点の地割れ
（斜めに黒く見える部分が地割れ）

写真6　別堀十二天遺跡第Ⅱ地点の地割れ
（細かく不規則なひびが地割れ）

3　ムラで使われた道具

高田遺跡群では、発掘調査に伴って、数多くの遺物が出土しています。土器は、水や食料を貯蔵するための壺や煮炊きに使用するための台付甕、食べ物を盛るための高坏など、さまざまな種類のものが見つかっています。千代遺跡群と同様に、高田遺跡群からも東海地方西部や中部高地方面の土器などが見つかっており、他地域との交流をもったムラが存在していたことが推定されます。

ここでは、高田遺跡群で見つかった珍しい遺物を2点ご紹介しましょう。

ひとつ目は、高田宮町遺跡第Ⅲ地点(6)の竪穴住居で見つかった弥生時代後期の壺形土器です(写真7)。壺の肩の部分に片口状に小さな口が2つ付けられた特徴的なかたちですが、全国的にも類例が少なく、はっきりとした使い方は分かっていません。このような壺が、高田のムラの中でどのように使われたのか、興味深いところです。

ふたつ目は、高田北之前遺跡第Ⅱ地点(2)で見つかった、磨製石剣と呼ばれる石器です(写真8)。古墳時代後期の竪穴住居から出土しましたが、類例から弥生時代中期のものと考えられています。磨製石剣も東日本では資料数が限られるものですが、類似する事例が西日本で確認されています。使われている石材が、小田原周辺では採取できない頁岩と呼ばれる種類の石であることも注目されます。出土した磨製石剣は、先端部のみが残っています。全体的に丁寧に研磨され、黒光りし、刀の稜線である鎬が作り出されています。刃の部分は、潰して仕上げられていることから、実用的なものではなく、金属製の短剣を模倣した祭祀用の道具であったと考えられます。

写真7　高田宮町遺跡第Ⅲ地点出土土器

写真8　高田北之前遺跡第Ⅱ地点出土磨製石剣

4　墓の造営

高田の台地には、弥生時代後期から古墳時代前期の人々が暮らしていた集落が広がっていた一方で、亡くなった人々を葬(ほうむ)る墓、方形周溝墓(ほうけいしゅうこうぼ)も見つかっています。

方形周溝墓とは、長さ 5～20m程度の溝で周囲を四角く囲み、中央の部分に埋葬施設を作った墓のことです。周囲の溝は、つながって全周するものや、一隅だけが途切れるものなどがあります。高田では、調査面積が限られているため、部分的ではありますが、台地の北側の高田北之前遺跡第Ⅲ地点(3)や南側に位置する高田南原遺跡第Ⅲ地点(12)で方形周溝墓が見つかっています（写真 9)。

集落から程近い、台地の端のほうに墓域が広がっていたことが考えられます。しかし、集落の規模に比べ、見つかっている方形周溝墓の数は限られていることから、すべての人が方形周溝墓に埋葬されたわけではなく、特定の人びとが、方形周溝墓に埋葬されていたようです。

高田北之前遺跡第Ⅲ地点(3)の方形周溝墓の周溝からは、小田原では珍しい壺形土器が見つかっています（写真 10)。土器の特徴から、「吉ヶ谷式土器(よしがやつしき)」と呼ばれる土器であることが明らかになりました。吉ヶ谷式土器は、現在の埼玉県北西部～中央部を中心に分布する弥生時代後期の土器として知られています。方形周溝墓からこのような他地域の土器が出土したことは、方形周溝墓に埋葬された人や、方形周溝墓を造り、祭祀を行った人びとの系譜(けいふ)を考える上でとても興味深いことで注目されます。

写真 9　高田北之前遺跡第Ⅲ地点の方形周溝墓

写真 10　高田北之前遺跡第Ⅲ地点出土土器

Ⅲ　高田南原遺跡第Ⅱ地点の調査

（古墳時代前期）

1　低地部の調査

第Ⅱ章では、台地上の遺跡の様子を見てきましたが、ここでは、小田原厚木道路の南側、高田浄水場周辺で行われた高田南原遺跡第Ⅱ地点(11)の調査成果をもとに、低地部での人々の活動を紹介していきましょう。

高田南原遺跡第Ⅱ地点は、県道の整備事業に伴い、平成17年（2005）年の3月～8月に発掘調査が行われました。この一帯は、標高がおよそ12mと周辺よりも低く、かつては低湿地のような環境であったと考えられています。調査が行われる前までは水田として土地利用が行われていました。近年まで、遺跡の存在が知られていませんでしたが、多大な調査成果が挙がっています。

写真 11　高田南原遺跡第Ⅱ地点の溝
（天野ほか 2006）

2　低地部での生産活動

調査の結果、古墳時代前期と後期の溝が見つかりました(写真11)。水田の利用など、人びとが低地部に進出した結果、用水路と考えられる溝が新たに造られるようになりました。

古墳時代前期の溝は、3条が確認されています。80m以上にわたって検出された東西方向の溝に、南北方向の溝が連結する構造が、特に注目されます。溝の壁には突出する部分があり、板材などによって、水量調節を行っていた水門（すいもん）や止水堰（しすいぜき）のような施設であった可能性が考えられています。

溝やその周辺は、水分の多い環境であったために、通常の遺跡では腐ってしまうような木製品が良好な状態で、

2,000点以上も出土しました(写真12)。

そのほとんどは、杭や板材などですが、鍬や田下駄といった農耕具が出土し、県内でも類例の限られる貴重な資料となりました。また、大型の半円状の木製品は、長方形の穴があけられたもので、もともと別の製品であったものが堰などの施設の部材として転用されている可能性が指摘されているもので、注目されます。

鍬は、全部で3点見つかり、広鍬や狭鍬といった種類がありました(写真13)。顕微鏡観察による樹種同定の結果、強靭で弾力性のあるブナ科コナラ属の木材が使用されていることが分かりました。また、田下駄は板状のものが4点検出されていますが、スギが用いられていました(写真14)。田下駄などの板状の製品にスギを用いることは、東海地方東部のスギの多い地域では、一般的なあり方とされています。

遺跡周辺は、花粉分析の結果から、スギ林やコナラ属アカガシ亜属の照葉樹林が分布していたことが推定されています。これらのことから、農耕具の製作には、周辺の植生から比較的容易に手に入れられる木材の中から、農耕具の機能に合わせて樹種を選択していることがうかがわれます。考古学的な成果に、科学的な分析を組み合わ

写真 12　高田南原遺跡第Ⅱ地点木製品出土状況(天野ほか 2006)

写真 13　高田南原遺跡第Ⅱ地点出土木製品「鍬」(天野ほか 2006)

写真 14　高田南原遺跡第Ⅱ地点出土木製品「田下駄」(天野ほか 2006)

せることで、 当時の人びとの生活の知恵が明らかにされました。

一方、 古墳時代後期の溝は4条が確認されました。 80m以上の長さが検出された東西方向の溝からは、 7 世紀後半を中心に 6 世紀～ 8 世紀初頭の土師器や須恵器の破片が大量に見つかっています。 この時期のものとしては、 輪かんじき田下駄の足板と考えられる木製品が見つかっています。 古墳時代前期の田下駄と同様に、 スギ材が用いられていました。

3　水辺の祭祀

高田南原遺跡第Ⅱ地点の調査では、 木製品が多く見つかったことのほかに、 青銅製品が複数出土していることも、 注目される調査成果でした。 古墳時代前期のものと推定される銅鏡と弥生時代後期のものと推定される銅釧が検出されました。

銅鏡は、 直径8.1cm、 重さ45.9g、 中国鏡を模倣して国内で作られた小型仿製鏡と呼ばれるもので、 単独で出土しました(写真16)。もともとの鋳上がりが悪い上に、 かなり磨耗しているため、 文様が不鮮明ですが、 遺存状態は比較的良好です。 鏡背には、 乳と呼ばれる突起が 4 つ付けられ、 文様を分割していますが、 それぞれの間には、 放射状の直線や珠文とよばれる玉状の文様を不規則に施しています(図2)。 この文様の特徴から珠文鏡と呼ばれる鏡の種類に分類することができます。 表面は緑青で覆われてしまっていますが、 本来は銅の光沢によって、 鏡面は光り輝いていたことでしょう。

鏡の中央には、 鈕と呼ばれるつまみが付いています。 鈕には、 幅 2.5mm の樹皮が残存しているという、 大変珍しい状況が確認されました(写真17)。 鈕に巻き付けられた樹皮は、 鏡を吊るし持つための紐の役割をしていたのでしょう。

写真 15　高田南原遺跡第Ⅱ地点銅釧出土状況
(天野ほか 2006)

一方、 銅釧も遺構からではなく単独で出土しました(写真15)。 約1/3が欠損し、 全体的にやや歪んでいますが、 遺存状態は良好でした。 ほとんど風化はしておらず、 出土状況の写真が物語るように、 1,700年前後も地中に埋まってい

たとは思えない金属の輝きを残していました。

小田原市域では、完形の銅鏡の出土例として、永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点の住居跡から出土した重圏文鏡（じゅうけんもんきょう）が知られています（シリーズ4参照）。また、銅釧の出土事例としては、千代南原遺跡第ＸⅡ地点の2点が知られています（シリーズ3参照）。

このように県内でも希少な青銅製品が森戸川流域に位置する遺跡群で相次いで検出されていることは、この地域に住む人びとが、青銅製品を手に入れる力を持っていたということが考えられるでしょう。

また、古墳時代後期のものとして、溝から勾玉（まがたま）や臼玉（うすだま）といった石製品が見つかっています。いずれも祭祀的な性格の強い遺物であると考えられています。

古墳時代前期の青銅製品や古墳時代後期の石製品が出土していることは、高田遺跡群の低地部が単なる生産の場であったというだけでなく、水辺での祭祀が行われたような場所であったことが考えられるでしょう。

近年まで、遺跡の存在があまり知られていなかった低地部の調査が進んだことで、新しい歴史の姿が見えてきています。

写真 16　高田南原遺跡第Ⅱ地点出土銅鏡（1/2）（天野ほか 2006）

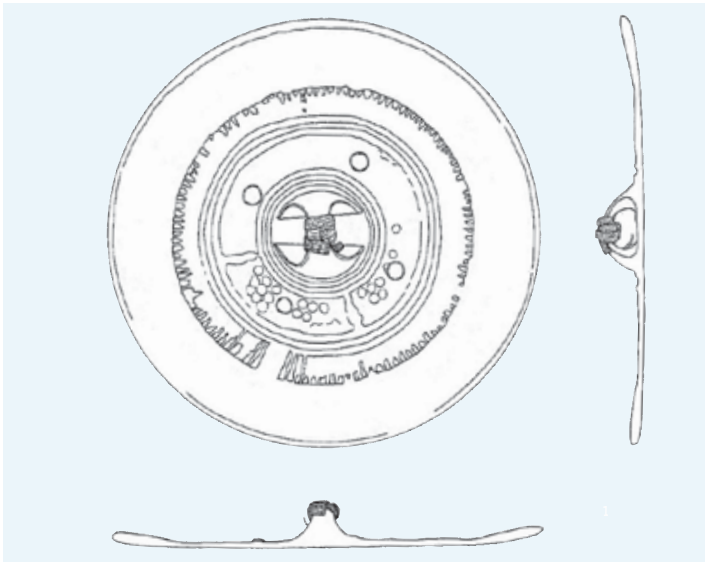

図 2　高田南原遺跡第Ⅱ地点出土銅鏡実測図（1/2）（天野ほか 2006）

写真 17　高田南原遺跡第Ⅱ地点銅鏡鈕拡大（天野ほか 2006）

曽我岸交差点
砂留田川
上大井駅
JR 下曽我駅
城前寺
物見塚古墳
山岸川
永塚交差点
良雲寺
永塚観音
永塚・下曽我コース
曽我病院
千
代
台
地
森
剣沢川
関口川
三島神社
大乗院
小海開発記念碑
千代大藪古墳
安養寺
円宗寺
駐在所
千代コース
千代交差点
千代寺院跡推定地
高田コース
森戸川
JR御殿場線
国府
円蔵院
1
2
3
4
5
6
7

図 3　下曽我駅からめぐる小田原の遺跡 モデルコース（1/9,000）